

四国遍路には遍路に無償で物品等を提供する接待という風習が息づいており、遍路道沿いにある接待所は四国遍路の景観を形成している。しかし接待文化の現状に関する研究は不足している。そこで本研究は、四国遍路文化の本質をより正確に評価し保全を考える上での基礎研究とするため、四国独自の貴重な文化資源である接待文化、特にその一形態である接待所及び休憩所(以下休憩所)の現状を調査し、その価値と保全への課題を明らかにすることを目的とする。

研究対象地は徳島県とした。その理由は1番札所があり遍路の数が多く、比例して接待者の数も多いと予想されたからである。調査は、1番札所霊山寺から高知県境までの約220.5km区間の遍路道を実際に歩き、見かけた休憩所全てで管理者に対してヒアリング及びアンケート調査を行った。また札所が存在する16自治体に対してアンケートを郵送し、行政の四国遍路に関連する取り組みを調査した。

調査の結果、徳島県の遍路道筋においては、55箇所に休憩所が設けられていた。その形態は大きく6種類に分類され、飲み物や日用品といった物品の他、情報・サービス(トイレ等)を提供していた。設置主体は多様化しており、昭和中期まで遍路の排斥政策をとっていた行政が今では地域住民に次いで2番目に多い主体となっていた。また、戦争を境に減少していた地域住民の集団による活動もみられた。動機には信仰心も依然みられるが、傾向として現在では「遍路に喜んでほしい」など、ボランティアという感覚が強いようであった。

休憩所の設置時期は全体の約6割が平成13年以降であり、場所や建物に歴史的連続性があるわけではなかった。ただし、管理者に管理をいつまで続けたいかと尋ねたところ8件が「自分の代まで」と答え、設置動機について5件が「立地条件が適していたから」と答えている。休憩所の設置管理は、「自分の土地が空いた」などできる人が無理のない範囲で自発的に行うため、どこかにできては消え、またどこかにできるという性質のものと思われる。加えて、90年代以降に歩き遍路が増えたことで休憩所の必要性が増し、平成に入って休憩所設置という接待行為が増加したものと考えられる。

しかし建物は新しくても、その意識には伝統の継承がうかがえた。ある管理者の女性は接待の動機を聞かれ、「自然な気持ち。接待は普通のことだと思っている。昔から親が聞かせていたし、そんなものだと思っていた」と答えた。「遍路に接待をする大人の姿を見て育った」と話した人は13件あり、幼い頃から接待の風習の中で育ってきたことが自然に接待を始めることができる理由のようである。すなわち遍路道周辺の地域社会には接待を行う風土があり、人々の中には素地ができていて、ということがいえる。

また行政の四国遍路に関連する整備や支援についても調査を行った。その結果、自治体ごとに取り組みに対する温度差があるものの、全体として行政は四国遍路を大衆化した地域文化と解釈し地域資源とみなす立場から、地域振興のため休憩所設置等ハード面の整備を行う役割を担っていた。一方でソフト面、特に民間の接待者等への支援や接待文化の普及啓発はほぼ行っていない現状が明らかとなった。

以上のことから接待文化は、社会情勢や時代に合わせて主体や動機、内容を変化させながら現在まで続いており、行為を自然に行う精神性が社会風土の中で生まれ継承されている点に特異な価値を持つと考える。そして接待された経験は遍路に充実感を与え四国遍路の継続につながり、それがまた接待の風土を形成するというように、接待文化は四国遍路文化の継承につき、重要な役割を果たしていると考えられる。

課題としては休憩所設置管理の後継者不足、普及啓発が挙げられた。行政による民間接待者への取り組みがあまり積極的でないのは地域住民が主体性を発揮していることの証明でもあるが、水道やトイレ敷設等の面で行政の協力を求めている休憩所管理者もおり、行政が担える役割はまだあると思われる。今後は、四国全県でも接待文化についての調査を行い、現状と課題を明らかにしていくことが求められる。(1684字)

キーワード:

四国遍路、接待、接待所、文化的景観